

平成30年度 第1回帯広市総合教育会議

1. 平成30年11月29日木曜日 16時 ～ 17時30分
総合教育会議を帯広市役所10階 第5A会議室に招集する。

2. 本日の出席者

帯広市長	米 沢 則 寿
教 育 長	嶋 崎 隆 則
教 育 委 員	田 中 厚 一
教 育 委 員	藤 澤 郁 美
教 育 委 員	佐々木 しゅり
教 育 委 員	塩野谷 和 男

3. 本日の議事日程

(1) 経過報告等

平成30年度帯広市における教育関連の主な取組経過

(2) 協議事項

帯広市小中一貫教育推進基本方針（原案）について

米沢 市長

本日はお忙しいところ、ご出席いただき誠にありがとうございます。早速ではありますが、本日の会議では、今年度の経過報告のほか、現在、策定を進めております小中一貫教育推進基本方針の原案についての意見交換を行います。小学校から中学校に進学する段階では、全国的に学習面の躓き、いじめ・不登校などが増加する傾向がみられ、新しい環境における学習や生活への不適応を起こす、いわゆる「中1ギャップ」への対応が課題となってきました。こうした課題に対応していくためには、義務教育の9年間を一体的に捉え、学校・家庭・地域が連携しながら、地域全体で子どもたちを見守っていくことがより一層求められてきています。これまで本市では、エリア・ファミリー構想に基づきまして、児童生徒の交流や教職員による合同研究会の実施など、小・中学校間の交流、連携などを積極的に進めてきたところであります。今後、これまでの取り組みをベースに、小中一貫教育による連続的、系統的な教育活動が推進されることにより、子どもたちが健やかに育まれることを期待しております。委員の皆様には、忌憚のないご意見をいただきますようお願いをいたしまして、私からの挨拶といたします。本日はよろしく願いいたします。

事務局
嶋崎教育長

続きまして、嶋崎教育長からご挨拶をお願いします。

それでは、私からも帯広市総合教育会議の開会にあたり、一言ご挨拶を申し上げます。今年に入りまして、下校途中の児童が犯罪に巻き込まれる事件や登校途中にブロック塀の下敷きになるなど、痛ましい事件や事故が相次ぎ、児童生徒の安全確保の取り組みが大きな課題となっております。さらには西日本豪雨や胆振東部地震でのブラックアウトなど、私たちの想定を超える災害の発生が起り得ることを今後は十分考慮していかなければならないと感じています。さて、私が申し上げるまでもなく、家族形態の変容や価値観の多様化、少子化の進行などを背景として、教育現場が抱える課題も一筋縄ではいかないような複雑化をしてきており、学校に求められている役割も以前にも増して多岐に渡っていると考えております。加えまして、現在の学校運営は家庭や地域との連携が不可欠となっており、コミュニティ・スクールや本日の議題でもあります、小中一貫教育の取り組みなどを通じ、児童生徒の健やかな成長に向けて、関係者がそれぞれの役割を担いながら対応していく時代となっております。帯広市教育委員会としましても、次期学習指導要領で重視されている「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた取り組みを

事務局
米沢 市長
山下調整監

推進し、将来の十勝・帯広の持続的な発展につなげていかなければなりません。この総合教育会議では、市長を交えて各委員には様々な角度からご意見をいただきたいと考えておりますので、どうぞよろしく願いいたします。

以後の議事進行は米沢市長にお願いします。

それでは、経過報告等につきまして、事務局からお願いします。

平成30年度帯広市における教育関連の主な取組経過のうち、学校教育部が所管する事項につきましてご説明いたします。資料1、平成30年度帯広市における教育関連の主な取組経過をご覧ください。6月より、小中学校の適正規模の確保等の取り組みに関し、前期対象校として選定した大空中学校について、地域検討委員会を5回開催し、様々な観点から今後の大空中学校のあり方についてご論議いただき、10月に意見書として提出していただきました。意見書を踏まえ、大空中学校の個別実施計画を2月に策定する予定としております。7月からは、次期教育基本計画策定に向け、市民検討委員会を設置し、今日の教育課題や今後の方向性などについて、ご論議いただきました。12月に提出していただく提言書を踏まえ、これからの帯広市の教育施策の柱となる次期教育基本計画の策定に着手する予定でございます。9月には、コミュニティ・スクールについて、教職員や市民の皆様幅広く制度を周知するため、説明会を開催しております。10月には、例年開催しております教育懇談会について、今年度は「ぐんぐん伸ばそう 子どもの体力と運動能力」などをテーマとして、市内4会場で開催し、運動の重要性や学校の取り組みなどについて懇談を行い、多くの貴重なご意見をいただきました。続きまして、11月には点検・評価報告書の取りまとめを行いました。効果的な教育行政の推進を図り、市民への説明責任を果たすため、帯広市教育基本計画の「個別目標」「基本方向」ごとに実施し、取り組みの成果と今後の方向性の2つの観点から点検・評価を行ったものでございます。12月の2つ目の丸では、小学校区と中学校区が整合していない地域のうち、一部の地域について、2020年に向けて通学区域の見直しを行いました。本日の協議事項でもあります小中一貫教育については、現在、基本方針（原案）を策定し、パブリックコメントを実施中であり、いただいたご意見等を踏まえ、2月に基本方針を策定する予定としております。また、学校施設の長寿命化に関連し、計画的に改修等を行うため、帯広市学校施設長寿命化計画についても、2月に策定する予定となっております。

ります。表の下に記載しておりますが、小中学校の取り組みといたしまして、教育実践の過程を広く公開し、参加者の意見や評価を授業改善につなげ、指導力の向上を図る目的で、6月から11月にかけて、小学校10校、中学校8校、計18校で公開研究会を開催しました。なお、主な取組経過のほかに、次のページ以降に、本市の教育行政の取り組みに関連した新聞記事を参考資料としております。学校教育部からは以上でございます。

森川調整監

引き続き生涯学習部が所管する事項についてご説明いたします。初めに8月の中城ふみ子賞の実施につきましては、帯広出身の歌人、中城ふみ子の功績を称えとともに、地域からの新たな文化の創造・発信を目的に、中城ふみ子没後50年となる平成16年を機に創設され、2年に1度実施しております。今回は、北海道はもとより、九州の大分県やアメリカ合衆国など、110件の応募があり、中城ふみ子賞のイシカワユウカさんのほか、次席1名、佳作3名、候補作3名の計8名が受賞されております。次に9月、第66回動物園技術者研究会帯広開催につきましては、毎年1回、全国の動物園水族館職員が集まり、展示動物の飼育技術に関する研究発表を行っているものでございます。本市での開催は昭和58年以来、2回目の開催となり、全国から102名が出席し、野鳥の感染症や展示動物とのふれあい事業などの研究発表のほか、おびひろ動物園の施設見学を行ってございます。次に10月、八千代A遺跡出土品の重要文化財指定につきましては、遺跡からの出土品として、十勝で初めて指定となったものでございます。昭和60年度から63年度にかけて発掘調査が行われまして、北海道東部における最初期の定住生活の生活や文化的様相を理解する上で極めて重要な資料であることが評価されたものでございます。国の文化財審議会の答申を受けまして、夏休みに開催した特別企画展には、3,500人を超える大勢の方々にお越しいただいております。現在は百年記念館の常設展示室において、指定の対象となった出土品を公開しております。次に11月、北海道集治監十勝分監関連の北海道遺産選定につきましては、緑ヶ丘公園内にある市指定有形文化財の石油庫、レンガを焼いたのぼり釜の跡などが、北海道開拓を支えた近代遺産として、本市や網走市など道内5市町村に所在する施設などと一括して選定されたものでございます。囚人労働による道路開削や農地開発などの使役によって進められた北海道の初期インフラ整備の歴史と、本州の当時の最高建築技術や文化をもたらし、地方文化形成を担ったもの

であることが評価されたものでございます。なお、市内では、北海道の馬文化に次いで2例目の選定となっております。次にI S Uワールドカップスピードスケート競技会・帯広大会の開催につきましては、今季国際大会の開幕戦が明治北海道十勝オーバルにおいて開催されたものでございます。24の国と地域から、選手225名、役員109名が参加し、観客は3日間合計で5,358人で行われました。十勝ゆかりの選手も数多く出場し、観客からの大きな声援の中、リンクレコードや自己ベストなどの記録が数多く出た大会でございました。また、事故もなく無事大会を終了することができましたことから、主催の国際スケート連盟や参加したチームの代表からは、最高の大会であったとの評価をいただいたところでございます。次に12月の教育基本計画策定に向けた提言書受理につきましては、社会教育委員会議において、社会教育のこれからの課題や役割、施策の方向性について、昨年度の2月から6回にわたってご論議いただいた内容を提言書として受理するものでございます。最後に1月、I I H F女子U18アイスホッケー世界選手権の開催につきましては、日本で初めて開催されるトップディビジョンクラスのアイスホッケーの世界選手権でございます。参加国は日本をはじめ、アメリカ・スウェーデン・カナダ・ロシアなど8か国、選手役員220名、競技役員など100名が参加予定で、地元帯広出身選手の出場も期待されております。大会の様子は世界各国に伝えられ、ワールドカップスピードスケートに引き続き、帯広の魅力を世界に発信できるものと考えております。説明は以上でございます。

米沢 市長

ただ今の取り組みにつきまして、委員の皆様からご意見やご感想などをお伺いしたいと思います。田中委員からお願いしたいと思います。

田中 委員

それでは、私から今年の教育委員会関連で記憶に残っている取り組みについて感想を述べたいと思います。大空地区の適正規模の確保の取組みが一番記憶に残っています。帯広は申し上げるまでもなく、適正規模の確保に関して先進的に進めてきた地域であると思っています。三中、六中の統合は、プラスに働いたと理解しています。結果として、翔陽中は新しい歴史を積み始めていると思います。一方で西地区の二中と緑園中に関しては、マイナスとは言いませんが、地域の問題、子どもの問題、学校のあり方の問題など、いろいろな課題が浮き彫りになったケースだと思います。豊成小の件は移転新築ですから、通学路の変更の問題ですので、それほど大きな課

題はなかったと思います。今回の大空地区については、これから取り組むべきことであり、改めて意見書を読ませていただきました。子どもの数は間違いなく減っていくわけで、それに対して、大空地区という特殊な地域と言いますか、他の中学校や小学校と統合するには距離にも問題があり、なかなか決定打がないという中で、エリア・ファミリーの流れの中で、小中一貫教育を進めていくことが将来の帯広の教育行政の1つのモデルケースになり得るという印象を持ちました。子どもの数が変わらないので、適正規模の取り組みの決定打にはなりません。ただ、それに代わるものになるかどうかわかりませんが、これから議論になる小中一貫教育のモデルケースになってくれば、とても意味が大きいだろうと思って読ませていただきました。様々な課題がある中で教育環境の改善と教育の質の向上の課題を2つ同時に大空地区で取り組んでいくということ、大空地区の地域の皆さんの認識、学校がここに在り続けることの意味、西地区でも議論になりましたが、改めて客観的に地域の方々が中心になって考える良い機会になると思っています。

米沢 市長
塩野谷委員

ありがとうございます。塩野谷委員お願いします。

私は長寿命化計画について話したいと思います。昨年から公開研究会に参加する機会があって、何十年ぶりに学校を訪問しました。中にはかなり老朽化が進んで、40年、50年近い施設だと、やはり改築などの対応が必要だと思って見ていました。今回の計画では長寿命化で70年から80年、使えるものは100年使うという内容だったと思いますが、学校それぞれの環境の変化も見て、取り組むべきテーマだと思います。私も以前は西地区に住んでいて、子どもが広陽小学校で、30年前は非常に子どもが多くて、運動会の場所取りにも苦労するくらいでした。緑園中学校に行きましたが、以前に比べ学級数が減っているように感じました。各学校はこれから長寿命化をするのですが、20年30年後には新たに改築していかなければならないという現実があります、その間には、先ほど田中委員もおっしゃっていたように、学校の再配置や統合の問題などが発生してくると思います。そういう意味で、子どもたちが減少している環境、まちの移り変わりの現状と20年後30年後を見据えたまちづくりのビジョンを合わせながら、統廃合や施設の利用を検討していかなければならないと思います。これからは70年80年は使うとするのですから、最低そのくらいは必要だと感じました。

米沢 市長

ありがとうございます。藤澤委員お願いします。

藤澤 委員

公開研究会に出席しての感想を述べさせていただきたいと思います。毎年帯広市内では公開研究会が開催されていますが、今年は6月から10月の間に、小学校10校、中学校8校で開催されました。私は小学校4校、中学校4校に出席させていただきました。公開研究会では、小学校は今年度に教科化され、中学校では次年度に教科化される道徳について特に研究されている学校が多くありました。どの学校もどのクラスも、いきいきと自分の意見を発表している光景が見られました。考え議論する道徳が実践されていると感じました。今後も教員は大変だと思いますが、子どもに対する働きかけなど、授業の進め方に工夫して取り組んでいただけたらと思います。道徳だけではなく、自分の考えをしっかりと持ち、他の人の考えを聞き、話し合っていくことは、道徳教科以外にも同様に大切なことだと思います。帯広市では道徳以外の教科でも、アクティブ・ラーニングというスタイルで、楽しさが伝わってくる授業を見ることができました。公開研究会は先生たちが勉強する場として、大変ご苦勞ではありますが、子どもたちのより良い授業や教育をめざして不可欠だと思います。ぜひ、これからも続けていただきたいと思います。印象に残ったこととして、中学校の特別支援教育で陶芸の授業を見せていただきました。生徒が他校の先生に制作方法やコツなどを教えていて、その姿がキラキラした目でとてもうれしそうだったのが印象的でした。教えることは自信につながりますし、特別支援教育は、子どもたち一人一人に合った多種多様な教育、様々な工夫が今後も必要だと感じました。南商業高校の授業を今回初めて見せていただいて、その感想も述べたいと思います。これまで入学式と卒業式での訪問はありましたが、授業は初めて見せていただきました。商業高校ならではの電子商取引とか、情報処理検定取得など、実践さながらの授業で生徒がとても熱心でした。このことから、検定取得率が高いということが見て取れました。以上です。

米沢 市長
佐々木委員

ありがとうございます。佐々木委員お願いします。

私からは11月上旬に2回参加しました教育懇談会のお話をさせていただきます。今回のメインテーマは、子どもの体力と運動能力、生涯スポーツを進めていきたいと思いますという内容でした。メインテーマについて、市民の皆さんの議論は、子どもの体力と運動能力に集中しまして、多くの市民の皆さんが子どもの体力や運動能力が低下していると実感して危機感を持っていると感じられました。お話の中で、いろいろな問題点が出てきましたが、特に自分たちの子ども

時代と比べて、外で遊んでいる、元気で走り回っている子どもが少ない。外で遊ばずに家でテレビやゲームをしていることについて、危機感を持っていらっしゃるようです。ある方のご意見では、遊びなさいと言って遊べるものではなくて、今の子どもは忙しすぎる。学校が終わって、習い事に行き、宿題をして、家庭学習もやらなければならない。そうするともう寝る時間になってしまう。遊ぶ時間がそもそもないのではないかというご意見がありました。私自身、親として耳の痛い話でした。私の息子と娘も、やることが多く、家に帰ってきたら疲れたと言って、働いている大人のような物言いをすることがあります。懇談会が終わってから思ったことなのですが、北海道は道外と比べて陽が落ちるのがとても早いので、家に帰って来て、宿題をして外へ出ようと思っても、今の時期はもう暗いです。早く暗くなるので学校でも外で遊ぶのは4時までという時期があります。家の中で遊ばざるを得なくなり、室内でテレビやゲームをするというのは、北海道の地域特性として仕方がない面もあるのかとも思います。体を動かして遊ぶ機会を設けたいのであれば、子どもが体を動かせる、遊べる施設や場所があれば、体を動かして遊ぶ機会が増えるのではないかと思います。子どものスポーツの入り口として、スポーツ少年団というのがあります。全国的にも加入者が減少しています。もちろん子どもも減っていますが、それ以上にスポーツ少年団への加入者の割合の減少率が高いです。子どもが9割に減っているとしたら、全国的には加入者が8割、北海道では7割くらい減っている。スポーツ少年団に入りにくくなっている現状があるのではないかと思います。指導者のOBの方のご意見では、少年団に入ると試合数が多すぎて、土日が全部潰れてしまうという点が問題点としてあるというお話がありました。息子を少年団に入れている身としては、確かに土日が全部潰れていると思ってお話を聞いていました。親の負担が大きいので少年団に入れたいけれど入れられないという親御さんの意見を実際によく聞きます。指導者の人数もありますし、簡単に解決できる問題ではないのですけれども、どんどん減っている現状について、何かできないだろうか、行政側からできることがないか思い付きませんが、何か対策が打てればと思ったところです。

米沢 市長
嶋崎教育長

ありがとうございます。教育長からお願いします。

私は地域の文化財が脚光を浴びたということで、うれしく感じたところです。10月に八千代A遺跡出土品の重要文化財指定とあり

ます。先ほど報告がありましたように、8月に関連の出土品展があって、3千人以上の方に見ていただいたということで、大変うれしく思っています。また、11月に十勝監獄が全道5つの集治監の一括で北海道遺産に選定されたということで、依田勉三の晩成社の開拓と並んで実質的に十勝・帯広の開発を進めた十勝監獄に光が当たったということです。2、3日前にインターネットを見ましたら、5つの集治監を回る復興割を兼ねたツアーの募集が既に出ていました。私自身は網走監獄しか行ったことがないので、機会を見つけて残りの3つも回って、皆さんと連携しながら良い形になればと思いました。地域であまり光が当たっていなかったところに、こうしたことで存在価値を高めていただいたと思っています。これからも関連する団体や自治体等と連携連動しながら、市民の皆さんの方々や訪れる方々にアピールできるようにしていきたいと感じました。以上です。

米沢 市長

ありがとうございます。それぞれご意見をいただいて、コメントさせていただきたいと思います。今の文化財のお話は良いことだと思います。どちらかというと日が当たっていなかったところが当たってきたというのは、最近のアイヌ文化への対応を含めて、日本の国が少しずつ変わってきたと感じます。佐々木委員の話ですが、冬場に外で体を動かすという場所というのは、私も懇談会で若いお母さんたちから、街中のどこかに大きい建物ではなく、家のそばに欲しいと言われます。そうすると学校とどうしようか、悩ましいところです。間違いなく冬場の陽が短い間の運動不足には昔から困っていると思います。試合が多すぎるという話は、良いところもあるけれど、忙しすぎる子どもたちにとってみると、家族皆が忙しくなってしまう。少年団は大きな役割を持っていると思うし、体力だけではなく、そこで人間関係も学べるので、そういう時間も重要だと思います。今の指導者がいなくなってくることも大きな課題だと思います。今年の市長部局の地域懇談会では、健康というタイトルで行いました。特に70歳代の多くの方々にいつになくご出席いただきました。自分たちがこんなに体を動かしているということを市長に言いたくて出てきたと伺っており、非常に心強かったです。健康に対する意識が高くて、体を動かすこと、人と会って話す、人とつながることを皆さん確認されていました。改めて体を動かすことができる環境づくりが重要だと感じたところでした。藤澤委員のご発言で、とてもうれしいと思った点は、自分の考えを持つことと発言さ

れていましたが、自分の小さい頃はどうかだろうかと振り返ると、自分の考えを持たせてもらえなかった気がします。「これはこうだから、こうしよう。これを覚える。これをできるようになる」というのが学校にいた時だったと思います。今の子どもは自分の考えを持っていいと教えられると聞いていました。アクティブ・ラーニングはまさにそうで、ここも随分変わってきた、良い変化だと思います。先生の役割の大きさについて、言うまでもなく、良い先生にあたって良かったと僕も思っていますが、やる気になるかならないかは先生次第だということがあります。皆さんに共有できる形で、公開研究会が機能していて、先生方の研鑽につながっていることは素敵なことだと思います。南商の生徒も一生懸命やっているという話で、電子商取引の新しい機材を触ることが、面白いのだろうと思います。熱心にやっていると聞いて安心しました。塩野谷委員のお話は、僕が一番言いたいことです。この仕事をやらせてもらって感じているのは、僕らの時代は時間軸が混乱している。過去の時間軸と変化する時間が全然違う。10年でこんなことが起きると思っていることが、あっという間に起きて、20、30年があっという間にやってくる。その時、最先端だと思っていたものが、あっという間に陳腐化してしまい、価値観まで変わって、世の中で必要とされる知識やノウハウが短期間で陳腐化してしまうと、世の中に出るために学校で教えることが問われる非常に難しい時代に入ったと思います。そういう中で校舎の長寿命化ということで、人口減はわかっていたはずですが。行政は70年、80年使う前提で造るけれど、70年後の教育はどう変わっていて、どうなっていくのか誰も考えていない。良いものを造るというのはその時の価値観で、僕らはその遺産をたくさんもらっています。いろいろな施設がありますが、これからハードを造る時には、100年先を見通し、投資を考えなければならないのは、非常に辛い時代になってきたと思います。田中委員の発言で、大空小・中学校のお話は、そこで出てくるいろいろな経験値は統合や小中一貫で役に立つだろうと思いました。小さな帯広でも、地域によって考え方は随分違う。一律にこうだというのではなく、その都度、地域の人や環境などを考慮して、慎重に取り組んでいくことが大切だと、田中委員のお話を聞きながら感じたところです。

他にはよろしいですか。

各 委 員
米 沢 市 長

ありません。

なければ、以上で経過報告等を終了します。

今回の意見交換は、帯広市小中一貫教育推進基本方針（原案）についてをテーマとしております。はじめに、現在までの進捗状況について、事務局から情報提供をお願いします。

帯広市小中一貫教育推進基本方針（原案）についてご説明いたします。お手元の概要版をご覧ください。平成27年度に学校教育法が改正され、義務教育学校等が整備された以降、全国において様々な小中一貫教育が展開されてきております。本市におきましても、こうした動きを踏まえ、子どもたちの学びや育ちの現状と課題を把握するとともに、小中一貫教育への対応について検討を重ねてまいりました。記載内容につきましては、1. はじめにでは、この基本方針は、小中一貫教育の推進に関わる基本的な考え方を示すことを目的として策定したものであり、策定後も方針に基づく取り組みと改善を重ね、学校教育の質的向上に取り組んでいくこととしております。2. 小中一貫教育導入の背景では、子どもを取り巻く環境の変化や本市の現状等について記載しております。3. 小中一貫教育導入の必要性では、本市でも、いわゆる中1ギャップと言われる、全国と同様な課題が存在しているほか、少子化等による学校の小規模化といった課題が存在し、義務教育9年間を見通した教育活動を系統的に行うことにより、こうした諸課題への対応と教育環境の充実を図るため、小中一貫教育を推進していく必要があるものとしております。4. 帯広市が目指す小中一貫教育では、(1)で基本理念、(2)は目的について記載しているほか、(3)帯広市が目指す小中一貫教育の姿では、エリア・ファミリー構想を基盤として、小中学校が目指す子ども像を設定・共有し、義務教育の9年間を通した連続性・系統性に配慮した一貫性のある教育活動を展開し、家庭・地域とともに子どもたちを育ていくものとしております。(4)小中一貫教育推進の基本的視点では、基本理念の達成に向け、小中学校間で目指す子ども像を共有するなど、4つの視点を基本として小中一貫教育を推進するものとしております。5. 小中一貫教育の取り組み内容では、(1)想定される小中学校の組み合わせとして、3つの形態を示すとともに、各エリアの実情に応じた小中一貫教育の推進を図っていくこととしております。(2)小中一貫教育の段階的な発展では、エリア・ファミリー構想を基盤として、これを段階的に発展させ、義務教育9年間を通した系統的な教育に取り組んでいくこと、(3)小学校から中学校への滑らかな接続では、既存の6-3制を維持しつつ、子どもたちの発達の早期化や学習内容の高度化等

を踏まえ、学年段階を3期に分けて捉え、小学校から中学校への円滑な接続を図る取り組みを展開することとしております。(4)(5)では、具体的な取り組みを推進、評価するための組織の設置について記載しております。6. 小中一貫教育を推進するための理解促進では、教職員や地域住民の理解を促す取り組みを行うことを記載しております。7. 今後の主な取り組みの進め方では、来年度からすべてのエリア内の小中学校においてSTEP2の取り組みに着手することとしております。最後に8. 今後のスケジュールにつきましては、現在、11月下旬から12月下旬にかけてパブリックコメントを実施し、その後、教育委員会会議、建設文教委員会に報告し、2月の教育委員会会議で決定する予定でございます。以上です。

米沢 市長

ありがとうございます。教育委員の皆様には、これまでも本計画の策定にあたり、ご議論をいただいていると思います。こういう機会ですので、改めてご意見やご感想を伺えればと思います。

田中委員からお願いします。

田中 委員

小中一貫教育推進基本方針について、思うところを大まかに整理して、大きく3つ考えてまいりました。1つは、今、私は短大に勤めておりますので、今の若い子たちから見た義務教育の間に一体何を行ったらいいのか改めて確認させていただきました。さらに9年間を見通した教育課程の及ぼす効果についても考えました。2つ目は、少し広げて、人口減少社会で市長がよく言われる人づくりの問題、ソフトの問題も含めた、ふるさと教育等を小中一貫の中でどういう形でやっていけばいいのかということ。最後に、小中一貫教育は少子化に合わせて全国展開されるだろうと想定されますので、帯広はどのような形で行っていったらいいのかということ。市長もよく言われるとおり、これからはAIの時代になっていき、若い子たちが人間性を発揮した仕事に就けるかということ踏まえて、20、30年後は難しくても、10年後を目指した形での教育を考えていかなければならないだろうと思いつつ、この推進基本方針を見させていただきました。最初に学生のことと言えば、一番思うのは、好奇心が欠如していることを感じます。それぞれは持っていて外には見えないのかもしれませんが、今の若者は好奇心を持って動いているかというと、そうでもないような気がします。私だけが思っているのかもしれませんが。我々の時代と決定的に違うのはインターネットで、情報があり余るほど勝手に取ることができるので、好奇心を持つ以前に勝手に情報が入ってきます。教育長の先ほどのお話

でもインターネットを見ればすぐに情報が入ってくるので、知る努力を私も含めてしなくなってしまったことが、若い人たちにとってかなり大きな問題なのかもしれない。私たちが学生の時は、市長もそうだと思いますけれど、ゼミの時には、その度に分厚い本を見て調べていました。そんなことをしなくても済む時代になってしまいました。「世の中は不思議に満ちている」と誰かが言っていたいますが、今の若い子にはそれがなくなってしまうので、だからつまらなく見えている。それと好奇心の問題があるのだろうかという気がしました。一方で、藤澤委員から、プレゼンテーションとか、アクティブ・ラーニングを色濃く出してきた十数年間の帯広の教育だったと思います。そのメリットはすごくあると思います。いきなりあてても、昔は真っ白になって何も言えない子が多かったけれど、今は割と普通に話します。一方で心配なのは、私たちの世代は暗記しろとか、市長もおっしゃっていたことをやらされました。そのメリットはなかったのだろうかと思っています。今、私たちが話したり、物を考えたりできるのは、もしかしたら、知識を押し付けられたことがあったかもしれないという気がする。思考力の源泉には、ある程度の知識は必要だという気がしますので、アクティブ・ラーニングは決して悪いことではなく、むしろ良いことだと思いますが、知識の押し付けをなくしてしまうのも恐怖に感じるのが今の学生を見て思うことであります。話は変わりますが、9年間の教育で言うと子どもの意識は明らかに変わると思います。今までは小学校1年生から6年生、中学校1年生から3年生と段階を変えていたので、これからの小中一貫の流れでいくと、箱は今までと同じだとはいえ、意識として、小学校6年生で終わって次ではなくて、中学校3年生は小学校1年生を見るだろうと思います。今までは中学校3年生は中学校1年生を見ていて、小学校6年生は小学校1年生を見ていたと思います。ところが、小学校1年生も中学校3年生を見るという流れで、9年間を大きく捉えることになるので、言い方が良いかどうか分かりませんが、中学生は悪いことができないと思います。今までは、小学校6年生は小さな小学校1年生を見ていて、あまり変なこととはできないと思う流れが、多分、中学校3年生に出てくるのではないかと思います。思春期の時にそういうことがあると大きいと思います。先生の意識も変わるのではないかと思います。小学校と中学校の教え方は違うと思います。中学校の先生が小学校へ行って教えることが可能になりますので、そうすると、中学校の先生は、私

の説明や教え方で、なぜわからないのだろうと悩むだろうと思います。小学生に対して、わからないのは君たちのせいだとは言えないだろうと思います。学校の先生方の教える根源的な意味や他者の問題など、考えるいい機会になると思います。地域の方たちの意識も変わるだろうと思います。西地区で問題になったのは地域の問題でした。権利ということではなくて、自分たちの学校として、どうこれから意識していき、その地区で、こういう子どもを育てて、帯広市に北海道や日本に出していく根源を我々が作るという意識を地域の人が持ってくれると、そのためにCSもあるのでしょうか、そういう流れになっていくのではないかと思います。私は小中一貫は良いことだと思っています。人口減少に関して話を広げてしまい恐縮ですが、ふるさと教育の話がよく出ます。市長や教育長からも依田勉三や松浦武四郎の話がよく出てきます。当たり前のことだし、良いことだと思っています。先日、ラジオを聞いていて、パッチワークの風景は元々あったわけではない、あのために、どれだけの人間がどれだけの開拓の汗を流したのかという話をしていました。結局、具体的なイメージ、何も無いところに依田勉三が率いる晩成社が入っていき、何をしたのかについて、どれだけリアリティを持って子どもたちが意識できるかということだろうと思います。うちの学生は依田勉三も知らない、よく先生に怒られています。知らないのではなくて、イメージとして理解できない。帯広・十勝の子どもであれば、みんな教えてもらっているはずですから。そういうところをどういう形で、小さいうちに教えることができるかということです。実際に松浦武四郎は北海道を全部歩いたわけですから、伊能忠敬もそうですけれど、具体的なイメージを出してあげることが大事で、それがあって初めてふるさと意識が芽生えてくるのではないかと思います。その上で、それに比べて他の地域はどうか、日本はどうか、世界はどうかという話になってくると思います。ふるさとを理解して、その上で十勝・帯広の良いところはどこなのか。良いところだけというのは問題だと思っていますから、悪いところも含めて、その上で帯広は素晴らしいと思う大人になっていただきたいと思っています。最後に1点だけ、結局、優秀な子どもであっても、なくても良いのです。一番大事なことは何かといたら、異世代間、おじいちゃんや小さい子にとって、どういう若者が素晴らしいかといたら、優しい子だと思います。市長もどこかでおっしゃっていたような気がします、優しいというの

米沢 市長
塩野谷委員

は、見ず知らずのおじいちゃんが転んだ時に手を差し伸べるとか、小さな子が危ない、心配だと思って手助けするとか、そういう若い人がたくさんいる地域になれば、帯広の発展になるだろうと思います。東京へ行っても、そのような雰囲気は全くないです。おじいちゃんが転んでいても誰も手を出すわけでもないように見える。小中一貫の中で意識してやっていると、地域の子どもの数が減って人口も減るでしょうけれども、良い地域になるだろうという気がします。小中一貫教育にすることは期待できると考えています。

ありがとうございます。塩野谷委員お願いします。

私からは1点お話ししたいと思います。現在の学校施設を使って、小学校と中学校を今の方式の6年間と3年間の教育から9年間を通して教育を行うということです。小中一貫教育の基本理念を読むと、小学校及び中学校が義務教育の9年間を一体的に捉え、家庭・地域と連携し、確かな学力と豊かな人間性・社会性を身に付けた、帯広の明日を拓くたくましい子どもを育成するとあります。教育理念に沿って、各エリアが目指す子ども像を明確に、すべての各組織が共有して実現に向けて取り組んでいく。今までの小学校方式や中学校方式だったものが1つの目標に向かって、1つの組織になって行っていくことは重要なことだと認識しています。現在もエリア・ファミリー構想を基盤とした各エリア内の連携促進にも取り組んでいて、帯広市一丸となって小中一貫教育のモデル校を作り上げていけたら良いと思います。今回の大空地区については、想定される小中学校の組み合わせ方法はA B Cなどのパターンがいろいろありましたが、組織として行っていくのは非常に大変だと思いますけれど、この書かれているやり方で取り組んで、ぜひ、9年間教育の成果が出るような形を作りあげていただきたいと思います。大変ではありますが、非常に楽しみな面でもあります。それから、小中一貫教育には直接関係はないかもしれませんが、先ほどからアクティブ・ラーニングの話が出ています。公開研究会に行き、昨年、初めてアクティブ・ラーニングという言葉を知りました。学校でもI C T教育やグループワークをする姿を見て、我々の時代はどちらかというと知識を理解させる、習得させることに重きを置いていたけれど、今はその知識を使うこと、思考力や判断力や表現力を養うような教育をしている。非常に良い方向に変わったと思っています。学校組織の目的を簡単に言うと、子どもたちが将来、学んだことを生活や仕事で使うということ。小中一貫教育の基本理念にあることを実現していく、

そういう意味では、今の学校教育は良い方向に変わったという印象を受けました。社会へ出てからも、自ら学ぶ力や考える力が必要ですから、単に知識を理解、習得するだけではなく、使うという方向はプラスだと感じました。

米沢 市長
藤澤 委員

ありがとうございます。藤澤委員お願いします。

小中一貫教育を進めていく上で考えられることを3点ほどお話ししたいと思います。1点目は、教職員の負担が増すのではないかと思います。現在も教師の働き方改革が進められておりますが、小中一貫教育の導入にあたり、教師の負担増が予想されます。小中学校の連携を強めるためには、小中学校の教職員が互いに話し合い、共通認識を深める必要があり、小中学校の打ち合わせや合同の研修を行うことが有効だと考えられますけれど、その時間を確保することが難しいのではないかと思います。日々の業務に追われる中、小中一貫教育を導入することで、特に導入初期段階を中心に業務量の増加が生じる可能性があると思いますので、教職員の負担をできるだけ軽減するための対策が必要だと思われます。教職員の加配もさることながら、校務支援システム導入とか、打ち合わせのためのテレビ会議システムなど、いろいろ活用して負担軽減のための工夫が必要だと思いました。2点目は、学校、地域、家庭のより一層の連携強化が必要だと思います。地域住民にも小中一貫教育を理解してもらう必要があります。子どもの教育は学校と家庭だけでは成り立ちません。地域の力が必要です。現在、帯広市はエリア・ファミリー構想を基盤としておりますが、地域と連携した教育活動を展開するために、地域住民に対して、小中一貫教育に関する情報や各エリアの取り組み事例などを積極的に発信していかなければならないと思っています。一方的に地域が学校と子どもたちを応援、支援していく関係ではなく、子どもの育ちを軸として学校と地域がパートナーとして連携協働し、膝をつき合わせて、意見を出し合い、学び合う中で一体感が生まれるのではないかと思います。一部の人だけが参画し協力するのではなく、地域全体で子どもたちの学びを展開していく環境を整えていくことが必要で、子どもとの関わりの中で、大人もともに学び、育ち合う教育の構築が必要だと思いました。これからの学校と地域の連携、協働の姿を具現化していくためには、学校と地域の双方で連携、協働、推進するための組織的、継続的な仕組みを導入していく必要があると思いました。3点目は、現在、PTA活動など保護者の負担が大きいという声を耳にします。PTA

活動や地域支援本部事業や見守り活動など、学校に関連する取り組みは様々で、一部の保護者が複数に携わっていて負担が大きいのは否めません。どうしたら保護者にPTA役員をやってもらえるか、各学校ではいろいろ策を練っていますが、なかなかうまくいってはいないと思います。子どもの教育は学校だけでは成り立ちません。家庭、地域の連携なしにはやっていけません。保護者の参画が必須だと思います。PTA役員は負担感が大き過ぎると思ってしまったら、億劫そのものなのです。私自身は子どもが入学するということは、親も入学するという意識を持ちました。保護者の方々にもそういう意識を持ってほしいと思っています。保護者も大いに学校へ行ってほしいと思いますし、子どものための犠牲のPTAではなく、そこで友達を作り、楽しく参加して、仕事や家事以外で、自分の力が発揮できる場だと学校を捉えてもらいたいと思います。学校に出入りすれば、子どもの学校での様子を見る機会が増えますし、先生からも子どものことを聞けて、なおかつ、地域のことも知ることができます。そういうことを考えまして、小中一貫教育と併せてコミュニティ・スクールの導入は、保護者と地域の方々が学校へ出向いていただく、大変良い取り組みだと思います。子どもの教育だけではなく、保護者や地域の方々にとって、生涯教育の位置づけとして、地域活性化につながると思いました。以上です。

米沢 市長
佐々木委員

ありがとうございます。佐々木委員お願いします。

小中一貫教育には大賛成です。今回の基本方針原案を読ませていただいて、自分なりに調べてみたり、自分の子ども時代を思い返しながらいろいろ考えてみました。この考えが始まった一番のきっかけは、中1ギャップの解消だと思います。言葉にすると何となく軽い感じがしますが、ちょうど心も体も変わる、ただでさえ風が吹いても不安定な時期に、授業の内容も変わり、突然勉強も難しくなる。人間関係も変わり、先生も厳しそうに見えて、慣れ親しんだ先生もみんないない。上下関係がやたらと厳しくなる。見た目も雰囲気も違う世界に12歳位で放り出されるわけです。自分の時を思い返しても、結構な恐怖でした。もちろんわくわく感もありますが、重い扉を開けて違う世界に来てしまったという感覚があり、私は地元と離れた中学校に行ったので、より強くそう感じました。久しぶりに会った地元の友達の雰囲気が変わったり、急に悩みを抱えだしたり、子どもたち当事者にとっては、かなり深刻な問題だと思います。子どもたちにとって、1年生の頃から先が何となく見える状況

を作ることが一番の解消法だと思います。知らない世界に放り出されることが一番の恐怖なので、知っている先生が中学校へ行ってもいることや中学生とも交流を深めることで、小学校の頃から見えるし、空気感も感じられる状況を作ることが小中一貫教育の良いところだと思います。小1の頃から中3の幅広い年齢の交流が深められることで、子どもの世界を広げる上でも重要だと思います。小学校でも中学校でもそうなのですが、自分の時を思い返しても、子どもの世界は、その学年、そのクラスだけがすべてです。その中の人間関係がすべてで、学校の中で頼れる大人は担任の先生だけです。担任と合う、合わないというのも、子どもの情緒に影響を与えますし、仲の良い4、5人のグループの中で、ちょっとした行き違いがあっただけで、この世の終わりのような焦りを感じて、その世界しかないのです。小さな出来事や問題が頭の中で大きくなって心の傷を負ったりすることがよくあります。その世界を広げてあげるのは、子どもの情緒の面でも重要なことではないかと思います。私の息子の話で恐縮ですが、中1ギャップならぬ小1ギャップみたいなもので、明るくてムードメーカーなのですが、小学校に入って急に大人数のクラスの中で、人間関係に気を遣ったり、親にも詳しく話さないのかわからないのですが、何かの焦りを溜め込んだり、2学期の頃から大声を上げたり、自分から先生に、イライラしていて迷惑をかけるので、空いている隣の学習室に行きますと話して、先生の了解を得て、しばらく過ごして落ち着いたら戻って来るということを繰り返し始めて、先生もよく家にいらっしゃいました。どんどん不安定になり、1年生の時にはどうしようかと思っていた矢先に、2年生の時に自分から急に野球少年団に入りたいと言い出して、4年生から6年生のお兄さんたちがたくさんいる中に入れられて、今までしゃべったことのない年齢の男の子たちと交流するようになって、ガラッと雰囲気が変わりました。小さなことでパニックになっていた子がとても落ち着いて、いろいろなことに対して、たいしたことではないという雰囲気を出すようになりました。先輩たちと知り合いだという妙な自信を付けたのかもしれませんが。そのクラスだけが自分の世界ではないということを目に見えて感じられました。9年間からすると、2年生から6年生だけで狭いのですが、それでも異年齢交流は子どもの情緒に良い影響があると感じていたので、小中一貫教育のことを考えた時も、まず、息子の姿が頭にあって、意義があることだと思います。小中一貫教育を進めていく

ことは、やることはたくさんあるし、制度も変えなければならないし、組織もいろいろ増えると思うのですが、ぜひ、進めていただきたいと思います。急に始めたことではなくて、帯広ではエリア・ファミリー構想で培われたしっかりした土台がありますので、その延長線として連携を超えた一貫した、最終的には教育プログラムができると思うのですが、とても良い土台がしっかりできているので、そういう面でもあまり不安はありません。以上です。

米沢 市長
嶋崎教育長

ありがとうございます。嶋崎教育長お願いします。

皆さんの言われたことに尽きると思います。少子化が進んでいる現実というものがあって、今まで子どもたち同士や地域の方々との接触の中で、普段、身に付けてこられたもの、他者との距離感だとか、してはいけないこととか、今はもう地域や家庭だけではできなくて、そういう意味で、学校への期待が背景にはあると思います。子どもたちの成長過程が肉体的にも前倒しになってきている現実があります。佐々木委員のお話のとおり、接続を滑らかにしていかなければならないということが前提にあって、昭和22年にできた学校教育法が初めて平成27年に改正されることにつながってくることが間違いなく後ろにはあると思います。その中で義務教育の部分をどのような形で進めていくことが良いのか、全国も同じで、帯広もエリア・ファミリーの中で、小学校と幼稚園、保育所とのつながりについても、随分と気を使ってきました。そういうところを見据えた動きが、今回、連携から、より強い一貫に近いものにしていかなければならない時代に来ていると思います。そのためにどう進めていくかは、こういったお話だとか、地域に出向いて、そこの地域に合った形のものをどう築き上げていくのかということに尽きると思います。ぜひ、大空地区をベースとしながら、良い形で進めていけたらと思っています。

米沢 市長

ありがとうございます。

皆さん小中一貫教育については、ポジティブな位置づけをしていただいていると思いました。今の塩野谷委員のお話にコメントしますと、今、義務教育の話をしていますけれど、9年間に3年を足して12年間、さらに4年間足して16年間、人生100年ですから、生き延びていくために、学びに区切りはないわけです。世の中は変わっていくわけで、それなのに切ってしまう、勝手に型にはめてしまう。これからはずっと学び続けなければいけない世の中になっていく中で、今やっている小中一貫教育は、何の違和感もないはずで

す。初めから大人が作った組織の中で形にはめられ、いろいろなギャップが出てきており、体力的な前倒しとか、社会環境が変わってきているのに、今までどおりやっていくことの方がかえって危ないだろうという印象を持って伺っていました。皆さんおっしゃっていましたが、今まであったものをつなげることは、そんなに簡単ではないし、言葉も通じないだろうと思います。日本語を話すから通じると思うけれど、地域で同じものを指して話す時にイメージするものですら違って、学校の先生だから大丈夫ということもなく、小、中ではもっと違うと思います。そういうことがあるという大前提でやっていかないといけない。役所の中でも、この単語で何をイメージするか聞くと、微妙な差があります。年代差もそうですし、部門間でもイメージするものが違う。それを意識して、目標としていくことについては、ぜひがんばって行ってほしいと思います。円滑な取り組みという言葉にすると簡単ですが、口に出して早い時期にぶつかってしまうことが大切だと思います。後半になって異論を言われると腹が立つことがあるので、最初の設計図を作る時期から、皆でいろいろなことを話して、言葉合わせをしていかないと、逆にうまくいかない感じがしていました。佐々木委員の話の中で一番印象に残ったのは、世界が広がる、見えるようになるということが重要で、中学生は小学生がいると悪いことができないという話がありましたけれど、これはやってはいけないとか、あれをやってはいけないと言うよりも、大人も含めて見えるようにすれば、基本は悪いことができないし、見えるということでいろいろな見方もできる。今、学校で起きているいろいろな問題は、見えないことも出てきて、親が必ずしもチェックできない。見えない世界が今、子どもたちにも入ってきてしまっているから、一生懸命広げていくこと、直接接点を持つことがとても大切だと、先ほどのお話を伺いながら思いました。田中委員の話で思ったのは、世界中が利害や損得でものを考える癖がついてしまって、メリット・デメリットで問題を判断していいのだろうかと思います。メリット・デメリットは割と時間軸が短いのです。将来のことがわからないから、どっちが得かよく考えて、短期でものを考えるようになる。学校教育に求められている一番反対の方だと思います。市場経済だと言われるようになって、お金さえあれば何でも買える世の中になり、格差社会、無縁社会になってしまった。誰とも縁を結ばなくても何でもできる世の中になってしまった。その中の学校教育をこれから考えていく時に、田中

委員もおっしゃっていましたが、地域における教育の、東京に対する最大のアドバンテージは、モラルと言ったら大袈裟かもしれませんが、優しさ、温かさ、嘘を言わないことなどだと思います。強制されなくても、そういうものが社会として辛うじてまだ残っているところと、それらが希薄化しているから巨大化して何百万人も住んでいられるところ、その差をもっと意識して小中一貫教育を含めた教育を行っていかなければならないと思いました。依田勉三の話の時にも、この人は失敗したということ、成功したわけではないと話しました。恨み辛みを言って死んでいった。しかし、その失敗した人を帯広市の開拓の祖だと思っているこの地域は、失敗を許す地域、そういう人たちを立派だと思える地域だと話しています。たいへん偉人のように話されていますが、先ほどふるさと教育の話にもありましたけれど、もっと目を向けるべきだし、コミュニケーションを取るときにも、相手がわかっているかどうか気にして話しができる子になると思う。テクニックとして話すレベルにはいつでも行けるとしています。小学校から中学校にかけて、優しさであるとか、生きていく上での基本的な人間力とか、モラルのようなものを地域全体で子どもを包みこんであげること、学校だけでは無理な部分は、先ほど言われたスポーツクラブもそうですし、親に学校へ入ってもらうなど、これも私がよく言うことですが、地域で愛された記憶のある子は戻ってくると思います。戻って来ない子もありますが、先ほど言っていた温かい子、育つ環境で僕らを守ってくれたという気持ちが心に刷り込まれていると、かなりの数がこちらを見えると思う。制度で釣るのではなくて、抽象的ですが愛されていることを教育で刷り込んでいく、急ぐのではなくて、小中一貫教育の中で、先生や親や地域のおじいちゃんやおばあちゃん、皆で私のことを見してくれたなという記憶を残せたら、あとは勉強すると思います。もう一度繰り返しますが、全員参加で、皆で子どもを育てていく、そのためのエリア・ファミリーという学校を中心にした形があって、そこで国から小中一貫教育と言われても、今までも帯広はやってきたことです。やらされ感は絶対まずいので、そうではなく、この地域はやってきていて、帯広の小中一貫教育はこれだというものを、皆で共有できるようなものを、早いうちにしっかりと議論も含めて行っていただきたいと思います。今後、この計画については、地域や保護者の皆さんと本当の相互理解をしながら進めたいと考えております。委員の皆さん引き続きよろしくお願いします。

事 務 局
米沢 市長
各 委 員
米沢 市長

最後にその他でございますが、事務局から何かありますか。

事務局からは特にございません。

最後になりますが、委員の皆様から何かございますか。

ありません。

それでは、以上をもちまして平成30年度第1回帯広市総合教育
会議を終了します。